

2022年10月16日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書12章1～12節

説教題：神の悲しみを思う

カナダで家庭集会をしていた時のことです。私は「終末」について説明をしました。「世界はやがて『今の世の終わり』の時を迎えます。神はこの世界を放ってはおられません。やがて必ず神の裁きの時が来ます。その時に、信仰者は裁きから守られて行くのです」というようなことを一生懸命しました。その話を聞いていた1人の姉妹がこう言われました。「でも先生、教会の牧師先生達は、今、先生が話されたことを本気で信じてはいないのでしょうか。もし本気で信じているのならもっと熱心に伝道されるはずですよ。何気なく言われた言葉でしたが、私には「伝道の姿勢」、それ以前に「信仰の姿勢」が問われる非常に厳しい—(また有難い)—言葉でした。キリスト者は、「イエスが再び来られる時—(再臨：今度は2000年前のように身を棄てて来られるのではない、世界の支配者として来られる)」を待望しているはずですが、でも私達は、普段どれだけそれを意識しているのでしょうか。今日の個所は、そのようなことを問いかける個所です。

受難週の火曜日の話が続きます。前回「祭司長、律法学者、長老達」がイエス様に「権威についての問答」を仕掛けて来たという個所でした。「何の権威で神殿の中で勝手なことをするのか」、それに対してイエス様は、彼らの「自分達の権威を守ることが何よりも大切になっているその頑なさ」を確認して、「私も話すまい」と言われたのでした。

今日の話はその続きです。イエスは、「祭司長達…」の質問に答えられない代わりに、彼らに向かって1つの譬話をされます。1節「ある人がぶどう園を造って、垣を巡らし、酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた」(1)。舞台設定です。「ぶどう園」、私達にはあまり馴染みがありませんが、イエスの話を聞いている人達はそうではありませんでした。「イザヤ書」にこうあります。「わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた…まことに、万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家」(イザヤ5:1～7)。イエスが「イザヤ書」の言葉をなぞるように譬話をされたことが分ります。だから「旧約聖書」を良く知っていた彼らは、イエスが「イスラエルの状況」について語ろうとしておられることが分かったのです。

ぶどう園には豊かな収穫がありました。主人は、収穫を受け取るために僕を遣わします。ところが農園を管理している農夫達は、送られて来る僕を次々にひどい目に逢わせ、最後は殺してしまいます。6節に「その人には、なおもうひとりの者がいた」(6)とあります。僕を送り尽くしてしまった主人は、自分の独り子を送ります。息子なら敬ってもらえると思ったのです。ところが農夫達は、「跡取りを殺せばぶどう園が手に入る」と言って息子まで殺してしまいます。しかし、ついに主人が戻って来て、農夫達に厳しい裁きを為し、ぶどう園を他の者達に与える。そういう話です。

この譬話は、何を意味する譬話なのでしょう。そしてこの個所は、どのような霊的なレッスンを語るのでしょうか。2つに分けてお話しします。

## 1. 内容：譬話が「彼ら」に意味すること～神の悲しみと招き

この譬話において、『主人』は神様、『ぶどう園』はイスラエル(神の民)、『主人が送った僕』は預言者達、『農夫』はイスラエルの指導者達、『主人の息子』はイエス様、ということになります。神は、イスラエルをエジプトから救い出し、救い出ただけではなく、一生懸命に人々の心を「神の民」に相応しく耕し、そうしながら約束の地カナンに導き入れられました。後は、実るための仕事を指導者達がコツコツとやれば良い状態にして、指導者を立てて、彼らがイスラエルを「神の民」として相応しく—(「心から神に従い、神の備えられた祝福の内に生き、そしてその祝福を他の民族にまで広げて行く、そのような民」となるよう)—導いて行くことを期待し、直接の導きを指導者に委ねられたのです。神ご自身は、神の民が窮屈さを感じない程度に、民から距離を置かれたのです。

ところが、その指導者達が自分の役割を果たさない、誤った導きをする。彼らは、神の民を真の神

に仕えさせようとするのではなく、ある時は神の御心に背くように導いたり、ある時は偶像礼拝に導いたりするのです。正しく神に実りを返さないのです。指導者が神の意に添わない導きをした時には、神は預言者を遣わして、彼らに「正しい道に立ち返れ、神の御心に適う歩みをせよ、御心に適う歩みをして神の祝福の中に戻れ」と呼び掛けを続けられたのです。神は、忍耐を重ねてそうされたのです。

「旧約聖書」の「歴史書」や「預言書」は、その記録です。

しかし、それでも彼らは、神の御心に添おうとしない。預言者の警告を無視し、時には預言者を邪魔者扱いして殺してしまいました。普通なら、そこで激しく怒って裁くところでしょう。しかし神は、それでも「指導者の—(民の)—悔い改めと立ち返り」を期待して、ついにはご自分の独り子を送られたのです。その御子を通して「神への立ち返り」を呼びかけられたのです。今この状況が、その状態なのです。今ここでは、「祭司長、律法学者、長老たち」が「邪悪な農夫」の役割を演じています。彼らは過去の指導者の誤りを知らないのではない。知っていても自分達の誤りには気づかない、自分のことは見えないのです。権威に酔って、権力に酔って、自分達の姿を省みることが出来なくなっているのです。

彼らの一番の問題は何か。農夫達のやっていることは、常識的に考えれば滅茶苦茶なこと。僕を殴る、蹴る、殺す。息子が来たら「息子を殺せばぶどう園を手に入れることが出来る」と思って殺してしまう。「こんなことをしたら、すぐに主人が乗り込んで来ることは予想しなかったのか」と思います。しかしイエス様は、この極端な話を通して、彼らの問題を抉り出しておられるのです。その問題とは、「結局この農夫達は、主人を見くびっている、(もっと言うと)バカにしている」ということです。ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の中にこんな場面があるそうです。ある高位の聖職者のところにイエスが帰って来られる。ところが聖職者は、イエスが帰って来たと聞いて、困惑して、イエスを牢獄に入れてしまうのです。彼はイエス様に言います。「私達はあなた無しで上手くやっている。邪魔をするな。立ち去れ」。「イエス様が帰って来て困った、あなたがいない方が良い」というのです。当時の教会の退廃ぶりが背景にあると思うのですが…。この時の指導者達の信仰が—(本人達は自覚していないかも知れませんが)—恐らくそういう状態です。神殿礼拝を通して彼らは潤っているのです。人々の上に立ち、権威(権力)の座を享受していたのです。神などいなくても、このままの状態が続けば良かったのです。そしてここで「農夫達が、『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺そうではないか』…」(7)と相談しているということは、もしかしたら彼らは、イエス様の中に何らかの「神性(預言者性)」を感じていたのかも知れません。しかし、もはやイエス様の中に神の業を見ようとはしません。無視するのです。

その彼らに、イエスは言われます。「あなた方は父なる神に対する恐れを無くしているのではないか。神を見くびっているのではないか。神の民イスラエルの指導者が神を見くびっている、あなたも神などいないかのように生きていたのです。ここに最も大きな問題があった。それが「神の悲しみ」であり「イエスの悲しみ」だったのです。神を見くびっている。神の存在を無視している。それはどういうことかと言うと、9節でイエスが語っておられる「やがて主人が戻って来る」ということを軽く考えているということです。神が「裁き主」として目の前に立たれる時が来るのです。ユダヤ人は、それを「主の日」と呼んで、待っていたはずなのです。しかし、それはもう形式的なものになっていた。実際は無視していたのです。

一方で、この主人はなぜ、僕がひどい目に遭わされ続けているのに、僕を送り続けたのか。最後は1人残った息子まで送ったのか。神は、なお神の民イスラエルに期待して、彼らの「悔い改め」を待っておられるのです。だから神は、期待しながら真実を尽くしておられるのです。人間は、相手の出方次第で態度をどうにでも変えるでしょう。でも、神はそうではない。神は、ご自分の契約に忠実です。どこまでも真実です。だからイエスは、「神の真実」を語りながら、自分がどうしてここにいるのか。「あなた方の悔い改めを心から願い、神の願いを伝えるために来ているのだ」と語りながら、彼らを、神に立ち返るように、悔い改めに招いておられるのです。

イエスは、最後に「詩篇」の御言葉をもって警告を語られます。この「詩篇 118 編」は、元々はイ

スラエルが引き上げられたことを詠う歌です。世界の力ある諸民族から見れば、イスラエルは、取るに足りない栄誉のない人々だと見なされていました。しかしそのイスラエルが、神の摂理によって、「神の民」として神の祝福を取り次ぐ特権を持つ民族になったのです。しかし今度は、イスラエルが今の高ぶりを捨てなければ、神の民としての特権は彼らを離れて行くのです。具体的には「家を建てる者たちの見捨てた石」というのはイエス様のことです。指導者は「自分達こそ神の家を造る者だ」と思っていた。彼らには、イエスが邪魔だった。それで「こんな者はいない」と言って十字架につけてしまった。しかしその彼らの捨てた石(イエス)が、神の計画の中で、大きな役割を果たすのです。神の国—(神の恵みと守りの中で神と生きて行く特権)—は、イスラエルからキリストの教会へ—(家造りたちが見捨てたイエスを神として拝み、その石の上に生きて行く教会へ)—移し与えられることになるのです。その石(イエス)こそが大切だったのです。イエスは彼らに、悔い改めて、神の御心を求めるように招いておられるのです。その招きに応じなければ、自分達の上に裁きを招いてしまうのです。「だから今、悔い改めなさい」というイエス様の切なる訴えです。彼らは、イエス様の訴えを聞いて、自分達の間違いを恥じ、悲しむことが出来たのです。悔い改めて「神に帰ろう」とすることが出来たのです。しかし彼らは、それを「自分達に対するあてつけ」としか理解しなかった。「神の悲しみ、イエス様の悲しみ」を理解せず、逆に腹を立て、そして実際に神の独り子を殺してしまうのです。

## 2.適用：譬話が語るレッスン～神の悲しみに応える

私達は、ここからどのような霊的な教訓を受け取れば良いのでしょうか。譬話の主人は、「ぶどう園」をしっかりと整えました。「ぶどう園」には、実りが約束されていたのです。「ぶどう園」は、「神の民」のことです。今の「神の民」は、イエス様を信じる私達のことだと考えて良いでしょう。私達にとって「ぶどう園に実りが約束されている」とは、どういうことでしょうか。信仰とは、この世を厭なものだと思ったり、人生を価値のないものだと思うことではないと思います。神様から預かっているこの人生、この生活、それは不毛のものとして与えられているのではないのです。それどころか、実りを結ぶことが出来るものとして、神は整えて、今も整え続けて、私達に預けて下さっているのではないのでしょうか。だからこそ、神に実りをお返しすることを期待されているのではないのでしょうか。

では、信仰的に見た「人生の実り」とは何でしょうか。「神を信頼し、神に感謝して生きる」、結局は、神はそれを何よりも喜ばれるような気がします。星野富弘さんが、苦しみのどん底で死を願っていた時、彼に大きな影響を与えたのは三浦綾子さんの言葉でした。「生きるということは権利ではなく義務です。私達は生きているのではなくて生かされているのです」(三浦綾子)。「こんな自分が生きていて良いのか」、そう悩み続けていた星野さんは、信仰を持ってから考え方が変えられました。「こういう自分でも生きていていいんだな。生きて立派なことをする、いい仕事をする、そういうことが人間にとっていちばん大事なことでなくて、とにかくこの生を神様に感謝して生きる、そのことが大事なことなんだ」(星野富弘)。そう考えて、神様に感謝しながら生きるようになられたのです。その思い、生き方を、神にお返しすることが大切ではないのでしょうか。

しかし、もう少し具体的に考えると、「人生を導く5つの目的」のリック・ウォレン牧師はこう言っています。「神の目から見た信仰の偉大なる英雄とは、この人生において繁栄を誇り、成功を収め、権力の座に就いた人のことでなく、この人生を一時的なものとして受け止め、永遠において神が約束された報いを受け取ることを期待して、神に忠実に仕えた人のこと」(リック・ウォレン)。神様は、どうしてイスラエルに何人も、何人も預言者を送られたのでしょうか。イスラエルの人々が、特に指導者が、心を柔らかくして、神の方を向き直り、生き方を改めることを願われたからです。なぜでしょうか。イエス様は、この譬え話の最後で、やがて神の裁きがあることを語られたのです。彼らに、最後の裁きの時を、喜びをもって迎えて欲しいと願われたのです。その神の愛の視点から見た時、その神様を無視し、自分勝手な生き方をしている彼らの生き方を悲しまざるを得なかったのです。それでもなお愛された。だから預言者を送り続けられたのです。私は、この6節の言葉には、神の愛が凝縮して示されていると思います。

千葉の神学校で1人の若い神学生が話してくれたのですが、彼は中学時代、それは酷い生活をしていたそうです。毎日のように喧嘩をしては問題を起こしていました。お母さんは教会で働く伝道師だったそうですが、何も出来ず、毎日、夜遅くまで泣きながら彼のために祈っていたそうです。彼は、それを聞いていました。結局、そのお母さんの祈りが、祈りの姿が、彼を変えて行ったそうです。お母さんの変わらない真実が、彼を立ち直らせたのです。私達は、色々なことはありますが、しかし様々な神の恵みの中で生かされています。先日もある方とお話をしている「神様を知っているということは幸いなことです」ということで話が終わりました。それは、神様がイスラエルと結んだ契約に真実であられたように、今も私達と結ばれた「新しい契約」にどこまでも真実でいて下さるからです。聖書に「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる」(2テモテ 2:13)とあります。ですから私達に対する「恵みの関係」を取り去ってしまわれぬのです。この個所で「詩篇 118 編」が引用されていました。「家を建てる者たちの見捨てた石、それが礎の石になった。これは主のなされたことだ。私たちの目には、不思議なことである」(12:10)。この言葉は、次のようにも解釈出来ます。私達の人生には「捨ててしまいたいような苦い経験」があります。今その時を通っておられる方もあるかも知れません。しかし後で振り返ると、それが「人生の大切な礎」になっていることが多いのです。辛い出来事が、祝福の出来事に変えられるのです。神はそういうことさえして下さるのです。この御言葉にそのような恵みも覚えさせられます。いずれにしても、神は真実を尽くして下さっています。私達を愛して下さっているのです。

しかし、そのように恵みを与え続けながら、でも一方で、御心に適わない私達の歩みに心を痛めておられる、涙を流しておられる、そういう面もあられるのではないのでしょうか。その神の痛みを、悲しみを、私達はどこまで思っているのでしょうか。以前も「私はなかなか人を赦せないでいる」という話をしましたが、一昨年鬱の時には、神様に食って掛ったこと等も思い出され、神様を悲しませることの多い自分を思います。皆さんは、何か示されることはないのでしょうか。私達も、示されることがあれば、その思いを、言動を、生き方を、少しでも神様に喜ばれる方に変えたいと願うのです。やがて私達もイエス様にお会いする時が来ます。私は、3年前のクリスマスに交通事故に遭い、その時、不思議な経験をしました。魂が神の前に連れて行かれる経験でした。神の前に立った時、足が震えました。「神の前に立つとは、こういうことか」と思いました。貴重な信仰体験だったと思いますし、警告だったと思っています。神様は、私達が神様を恐れるようにしてお会いするのではない、喜びに溢れてお会い出来ることを、願っておられるのではないのでしょうか。そして「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:21)と褒めたいと、一緒に喜びたいと願っておられるのではないのでしょうか。だから真実を尽くして下さっているのです。だからこそ私達は、イエスにお会いする時をゴールに定めて、今を、1日1日を、神様に喜ばれるように、主に忠実に生きて行きたいと願います。